



「戦略」という言葉は「戦争」などがイメージされるからか、受け入れにくいという人もいるようだ。しかし、一日、一週間、一カ月、一年、一生をどう過ごすかに置き直せば、ネガティブなイメージはないと考える。逆に、前向き思考の重要な考え方と評価すべきではないだろうか。自分が研究対象にする植物でも、発芽、成長、種子形成という生活環全体を通して、さまざまな生き残り「戦略」を用い、巧みに生活している。

19世紀のイギリスの自然科学者

チャールズ・ダーウィンが唱えた進化論には、「強いものが生き残るのではなく、適応したものが生き残る」という概念がある。植物、作物を材料として、遺伝、進化、栽培化などを考えている自分には重い言葉であり、現在の

適応戦略と進化

球児の好プレー手本



東北大学大学院
生命科学研究科教授

渡辺 正夫

研究の一部でもある。また、生物がどのように環境に適応するのかが研究する「適応戦略」という分野もあるくらい、この現象は深い意味を持つのである。生物としての「戦略」の上に「適

(熊本)。済々黈七回裏の攻撃、1死一、三塁。遊撃手がライナー性の打球を好捕し、2死。一、三塁走者が飛び出しており、それを見て、遊撃手はためらわず一塁へ送球。これで誰しもがダブルプレーが成立し、無得点で終わったと思えた。しかし、一塁への送球でアウトになる前に、三塁走者が本塁を踏んだことで1点が入った。ある程度、野球をご存じの方であれば、疑問に思うであろう。

試合終了後、いくつかの解説の中に、「3アウト目がフォースプレーでない限り、3アウト前に走者が本塁を踏む

応力」が種としての生死を分けるということになる。

そんなことを考えつつ、本稿を執筆している頃、高校野球、夏の甲子園大会で好プレーに出くわした。大会第6日目第2試合、鳴門(徳島)対済々黈

と得点になる」というルールの記述があり、納得した。さらに驚かされたのは、試合後のインタビュで、三塁走者が「小学校の時に読んだ、野球漫画

・ドカベンでこのルールを知っていたので、常に頭にあった」と答えたこと

ふるさと伝言

だった。まさに、野球の「戦略」を熟知し、瞬時に状況判断を行い、「適応」した結果ではないだろうか。実際、自分が子供時代に、ドカベンでこのシーンを読んだときには、実際にこのようなことが起きるのかと、不思議に思ったくらいであった。

植物は一度根を生やすと、その場所で生涯を終える。つまり、その環境に「適応」することが重要である。本来、乾燥を好む植物が水辺の川沿いにも適応して生育することもある。植物の花の花粉は多くの場合、訪花昆虫によって運ばれることから、昆虫に適応して開花時間、花色を「進化」させてきた。

さらに、土壌中からの栄養分が少なければ、それに適応した植物の形、大きさに「進化」していく。こうした植物の「適応戦略」やこの高校球児のように、何事も貪欲に柔軟に活用する「適応力」を身につけることができれば、現状から一步「進化」した世界が見えてくるのではないだろうか。

(わたなべ・まきお、今治市生まれ)